

小林章夫著「教育とは—イギリスの学校からまなぶ—」NTT 出版株式会社、2005年8月29日刊
を読む

大学は9月入学、6月卒業に

1. 一つの提案として、次のようなことは考えられないだろうか。
2. つまり、大学入学を現行の4月ではなく、欧米のように9月にして、在籍年限を三年間とし、夏休み前の6月に卒業式をおこなうというものである。なぜか。
3. (1)現在の大学入試は2月から3月に集中する。
(2)だとすれば高校3年の後半は、ほとんどまともな授業にならない。
(3)大学入学を9月とすれば、入試は7月あたりに設定される。そんな暑い時期に試験とは思うかもしれないが、今は冷房が完備しているのが普通であるから、これは問題ない。
4. (1)7月に入学試験となれば、大学進学をめざす高校生は3月に卒業してから3か月間は、入学試験をめざして勉強すればいい。
(2)推薦入試で早々と入学を決めた生徒は、
(3)3か月間アルバイトをするもよし、ボランティアでも、旅行でも好きなことをすればいい。
(4)イギリスの「ギャップ・イヤー」の変形、「ギャップ期間」である。
(5)いずれにしてもこれで、高校の3年間の授業は一応全うできる。
(6)一応というのは、それでも早くから受験指導に熱心となる学校はあるはずだから。これは仕方がない。
5. (1)さて大学へ入ったら、旧来の一般教養科目は不要とする。
(2)最初から専門科目に集中すればいい。
(3)それがむずかしいというのなら、一般教養科目は選択制として、好きなものを取ればいいようにする。
(4)ただしできれば、そうした幅の広い科目は高学年で取ることが望ましい。

(5)たとえば自然科学史というような科目は、いろいろな勉強をした上で履修して、初めてそのおもしろさがわかるはずなのである。

6. (1)一般教養を廃止すれば、現行の大学教育は3年で終えても一向に差し支えない。

(2)長ければ長いほどいいというものでもあるまい。

(3)そこでほとんどの学生は企業に勤めることとなるが、企業への入社はいよいよ4月である。

(4)したがって6月卒業後、9ヵ月ほどのブランクがまた出てくる。ギャップ期間である。

7. (1)このギャップ期間には、入社試験に備えての就職活動をするのが普通となるだろう。

(2)ただし現状では大学の4年目はほとんどこの活動に躍起となって、まともに授業に出てこないのが普通である。

(3)いわゆる「青田刈り」が一層進んだわけだが、この点に関しては企業との申しあわせで、6月卒業以後にすることを徹底させる。

(4)しかしそれが無理だとしても、現状に比べれば、大学における最終学年の惨状は改善されるだろう。

(5)すなわち現状ならば3年生の終わり、つまり4年になる前の春休みが就職活動のピークとなり、そこからあとの1年間にこの活動に忙殺されるが、9月入学、6月卒業、在学期間3年となれば、最終学年の最後の数ヵ月にこれが限定されるからである。

8. (1)就職先が決まれば、大学卒業後の9ヵ月にはいろいろなことができる。

(2)アルバイト、ボランティア、旅行、あるいは就職先での研修、何でも結構である。ひょっとすると先の仕事内容を見越して、英語学校に通ったり、コンピュータに習熟することをめざす学生も出てくるかもしれない。

9. (1)要するにこのアイデア、大学入学前と卒業後に、自由な時間をつくってしまうというもので、これを近頃の教育世界のはやり言葉を使えば、ゆとりというのである。

(2)さてこの計画、実現するものかわからないが、もしゆとりというのなら、こうしたことに目を向けるべきだと思うのである。

(3)考えられる反論は、桜の時期に入学ではなく、木の葉も落ちようとする時季に入学では、行く先が思いやられるというものだが、最近の日本は地球温暖化の影響で9月はまだまだ暑いし、木の葉も十分に生い茂っているはずである。

[コメント]

- (1) 小林先生の案に 2 点を除き全面賛成。
- (2) 大学入学は 9 月ではなく 10 月にすることが第 1 点。大学入試は 7 月ではなく 8 月下旬又は 9 月初旬にすることが第 2 点。
- (3) 10 月入学は世界の潮流。世界各地から優れた学長や先生、学生を日本に招くには 9 月でなく 10 月が適当。
- (4) 高校卒業から大学入試を行う 8 月下旬又は 9 月初旬までの 5 ヶ月間やれば、大学入試の準備は十分。
- (5) これに加えて、高校の卒業式を 3 月 31 日にして、高校生は 3 月いっぱい全力で高校の勉強をすべきというのが私の提案。

小林先生の提案は素晴らしく、傾聴すべきものと考えてる。

— 2012 年 10 月 6 日 林 明夫記 —